

氏名	海老原 優里		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博音第8号		
学位授与年月日	平成28年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題目	学位論文題目	ドビュッシーの演奏美学 —ドビュッシーが校訂したショパン全集の指使いから—	
学位論文等 審査委員	(演奏審査)	主査教授	熊谷 恵美子
		副査教授	井上 さつき
		副査教授	久留 智之
		副査教授	松本 総一郎
	(論文審査 及び最終 試験)	主査教授	熊谷 恵美子
		副査教授	増山 賢治
		副査教授	久留 智之
		外部 審査員 教授	岡田 暁生 (京都大学人文科学研究所教授)
学位論文の要旨			
<p>クロード＝アシル・ドビュッシー Claude-Achille Debussy (1862-1918) は、1915年にフレデリック・ショパン Frédéric François Chopin (1810- 1849) のほぼ全作品の校訂出版をデュラン社からの依頼でおこなった。このショパン全集にはドビュッシーの指使いが詳細に残されている。そしてその指使いは、非常に特異である。普通、指使いというのは「弾きやすく」するため（技術的な理由）であったり、「フレージングを生かす」ため（音楽表現の理由）に考えられ付けられるのであるが、ドビュッシーの指使いはそういった観点からでは理解しにくい箇所が多くみられる。本論は、ドビュッシーが校訂したこのショパン全集に見られるドビュッシーの指使いからその独自性を読み取り、新しい側面からドビュッシーの演奏美学を明らかにすることを目的としている。</p> <p>第1章では、ショパンの作品につけたドビュッシーの指使いを考察するにあたって、校訂版における指使いの変遷を示し、ドビュッシーが校訂したショパン全集の位置づけを行った。その後楽譜出版の歴史を概観し、18世紀から現代まで長い歴史を持つ出版社3社（ブライトコプフ版（ドイツ）、ショット版（ドイツ）、リショー版（フランス））を選択し指使いの有無調査を行った。調査した約339の楽譜のうち、124の楽譜に指使いの記載が認められ、指使いの記載は18世紀中ごろから次第に増えていることが見受けられた。その後ショパン全集の楽譜に絞って初版から現代までの出版譜を概観し、ドビュッシー校訂によるデュラン版の位置づけをおこなった。校訂版に自由な解釈が求められた時代にデュラン版が出版されたことを示した上で、ドビュッシーの指使いには彼独自の考えが反映されていると解釈した。その後、ドビュッシーがショパン作品の校訂作業を行った背景を調査した。まずドビュッシーがいかにショパンに傾倒していたかを示した。そのため</p>			

に知人らの証言、幼少時のモテ夫人の教育、ドビュッシーがパリ音楽院で演奏した試験曲からドビュッシーのショパン作品への思い入れを探り、ドビュッシーの中でショパン像がどのようにして形成されていったのかを追った。ショパンはドビュッシーにとって特別な思い入れのある作曲家であった。したがってドビュッシーのショパン校訂版には彼特有のこだわりがあらわれており、そこから彼自身のピアノズムを探ることは妥当なことだということを示した。最後にドビュッシーが参照した版を示した。ドビュッシーが参照した版については、彼の書簡と校訂楽譜の序文から導き出した。

第2章では、ドビュッシー校訂のショパン全集と11の版と比較し、ドビュッシーの指使いの特徴と傾向を考察した。まずドビュッシー校訂のショパン全集における指使いの考察を先行研究におけるドビュッシー校訂のショパン全集の指使いの考察を概観し、それぞれにおける問題点を抽出した。その後本論で比較対象とする版を選別しその根拠と共に示した。次に筆者自身が分析・抽出した指使いの特徴を考察した。筆者は《練習曲》と《夜想曲》を比較対象とした。考察から、ドビュッシーの指使いの特徴3点—a) 第4指に対して表現性をもたせている b) 強拍における親指の使用を避ける c) ポジションを保持する—が明らかにになった。

第3章では、第2章に行った指使いの考察から得られた指使いの特徴について、ドビュッシーの演奏・音楽美学との関連性を論じた。まず第1の特徴—a) 第4指に表現性をもたせている特徴—について検証した。ドビュッシーの指使いは、意識的に指を上げて第4指を用いる箇所が多く、意識的に音色を作り出すドビュッシーの意図があったと解釈した。また、第4指を緊張感のあるハーモニーの時に使う傾向があり、縦の音の響きに敏感に反応していたことが認められた。このことに関してドビュッシーは、旋律をとらえる際その下で支えるハーモニーの方が優位にたっていると考えていたという旨の証言を残しており、ドビュッシーは、響きにに応じて上声部で奏する旋律に音質の変化を要求していたと結論づけた。続いて第2の特徴—b) 強拍における親指の使用を避ける特徴—について検証した。この指使いによって、指くぐりを最低限にとどめアクセントが付きにくい効果があると解釈した。また、旋律の動きに沿わない指運びとなることから、旋律の持つ方向性や調性感をはく奪する意図があったと推測した。ドビュッシーの証言から、彼は旋律をそれが持つ性格よりそのフォルムを重要視していることを示し、その考え方がショパン作品の指使いに表れていると結論づけた。最後に、c) ポジションを保持する特徴—について検証した。この指使いについては、他の特徴と比較して特異であったため、その根拠を示すのに複数の側面からの検証を試みた。まず、このポジション保持の指使いが不自然で弾きづらく、それぞれの指が独立している必要があることを指の構造を示しながら説明した。指の独立が必然となるポジション保持の指使いの所以を、ドビュッシーがパリ音楽院で師事したアントワーヌ・マルモンテル Antoine-François Marmontel (1816-1898) の教育の影響であるとはじめは仮定したが、ドビュッシーのピアニストとしての技術的な問題があったこと、マルモンテル版との相違点の多さから、教育の影響を否定した。その後、ポジション保持の指使いが第2の特徴—b) 親指を強拍に避ける指使いと同様旋律の方向性を曖昧にする効果があることを述べ、彼の作曲書法との関連性を検証した。

以上の考察から、ショパンの作品の指使いを検討することによって、先の時代の調性音

楽から離脱し音響を並置し、また旋律を一つの塊として捉えるドビュッシーの新しい音楽語法が浮き彫りとなった。ショパンの音楽に書かれたドビュッシーの指使いの考察がドビュッシーの演奏法と音楽観との結びつきを強固なものにしたことで、ドビュッシーの自作品の指使い選択に有用な手掛かりを得られた。音響を並置するドビュッシーの作曲書法についてはこれまでも多く論じられてきたことだが、彼自身の指使いという演奏法の観点からという新しい側面から考察したことは、ドビュッシー作品の演奏の領域に新たな視点を投げかけることになろう。本論の最後で、現在出版されているドビュッシーの《ピアノのための12の練習曲》において、指使いの記載がある3つの校訂版の検討を行った結果、弾きやすさや合理性を優先した指使いが多くみられた。付録にて本論で導き出したドビュッシーの音楽観を反映した指使いを考案した。

演奏審査結果の要旨

申請者の研究は、ドビュッシーが校訂したショパン作品にみられる独自の指使い指示やフレージングに着目し、そこからドビュッシーのピアノ演奏における見解を検証し、ドビュッシーの〈ピアノのための12の練習曲集〉の運指法を考察するものである。この研究主旨は非常に興味深く、申請者の研究から生まれる成果は、今後のドビュッシー練習曲の演奏法に優れた貢献をするものと期待する。

演奏会の中で自分の研究について説明したトークは興味深いものであった。しかし、より内容を簡潔にまとめて発表するべきであった。研究から4つの結論が見えた、と話していたが、4つの内容がどのような分類の元で、どのように結論が見出されてきたのかがわかりにくかった。また、その結論からどのような見解が得られたのか、総合的な申請者の導きたいことが見えてこなかった。研究におけるユニークな視点は評価されるが、結論をどのように導いていくのか、今後の研究に期待したい。

演奏は博士の学位申請リサイタルにふさわしい内容であった。ドビュッシーの校訂版を使用してショパンのノクターン作品6-2-2、スケルツォ作品3-1が演奏され、その後にドビュッシーの練習曲全12曲が演奏された。その演奏は高い集中力と安定感を保ち、豊かな表現力と音楽性を示した。特にドビュッシーは深い洞察力と解釈に支えられ、色彩感のある音色と見事な技術力で、その演奏は圧巻であった。演奏家の表現しようとしていることがストレートに伝わってくる名演で、以上を総合して大変高い水準での合格と評価した。

論文審査結果の要旨

本論文「ドビュッシーの演奏美学」—ドビュッシーが校訂したショパン全集の指使いから—は、ドビュッシーが校訂したショパンのピアノ作品にみられる独自の指使いに着目し、そこからドビュッシーのピアノ演奏における見解を検証するという画期的な研究である。

全3章からなる本論文は「第1章 校訂版について」で、当時のドビュッシーによる校訂版の位置付けを300以上の楽譜の収集と、指使いの有無を調査することによって、その出版までの経緯と比較対象とする版の選出の裏付けを述べている。「第2章 ドビュッシーが校訂したショパン全集における指使いの特徴」では先行研究との比較、検証と校訂

版との比較により申請者自身による3つの特徴を挙げている。続く「第3章 ドビュッシーの指使いの根拠の検証」は本申請者が演奏家であることから実際に試奏を重ね、またドビュッシーの教育的背景を考え併せて、その特徴を検証し結論へと導いている。最後に付録として付けられた《ピアノのための12の練習曲集》におけるドビュッシーの演奏美学に裏づけされた指使いの記載こそが、演奏家の研究論文として大変意義深いものであり、評価の対象となった。

本論文の問題点としては、結論の1つでもある「表現性」という用語、また「音色」「音質」などの用語についての解説、もしくは定義がなされていないことの指摘があった。加えて「指使いとは何か」と基本的な定義に触れられていない点も問題として挙げられている。

以上の点を改善し、結論の部分での自身の実践例についての詳細な説明の補足と、比較研究の点でもう少し広い範囲での楽譜の検証の説明が付加されることが望まれる。

しかし全体としての論の道筋や結論には問題なく、演奏家としてのユニークな着眼点をもったオリジナリティのある論文になっている。特に自身で論旨に基づいた新たな指使いの提案を行っている点は高く評価できる。

申請者の研究は意義深く斬新な取り組みであり、研究の熱意と意気込みが感じられる。本論文は労作であり、今後のピアノ演奏、ピアノ教育に多くの価値と発展の可能性を十分に有しているものと考えられる。

よって課程博士（音楽）の学位を授与するに相応しいと判断されるものである。

最終試験結果の要旨

申請者は学位申請リサイタル、及び博士学位論文本審査に合格し、その所見は別欄（演奏審査結果の要旨、論文審査結果の要旨）に記載した通りである。

よって、最終試験に合格したことを認め、本大学院音楽研究科博士後期課程の定める博士学位（音楽）の授与規程を満たしているものと判断する。